

## 英訳しにくい日本語表現

加藤 典子\*

## Japanese expressions which are difficult to be translated into English

Noriko Kato \*

The main purpose of this paper is, at first, to clarify the factors of difficulty of translating Japanese into English, secondly, to contribute to better English conversation and writing for Japanese students by the clarification. By comparing Japanese formulas with English ones, the two factors of difficulty of translation are the presence or absence of subjects and honorifics. We maintain these factors are triggered by the difference of the ways of thinking between Japanese and English, on the basis of Ide (1998) and Suzuki(1975). As a conclusion, basic Japanese way of thinking is symbolized as “Yuugou-izon-gata,” on the other hand, English one, as “Jita-dokuritsu-gata.” These patterns cause the difficulty of translation, so students have to learn these different ways of thinking in English class.

## 1. はじめに

## 1.1. 目的・概要

本稿では、英訳しにくい日本語表現とその英訳を比較し、この英訳のしにくさは、一体何に起因しているのかを突き止め、よりスムーズな英会話や英作文上達等の、英語教育の向上に少しでも貢献出来るようにする事が目的である。

特に、以下の例文に見られるような、日本語独特の挨拶・決まり文句は、英訳し辛い事がわかるであろう：

「つまらない物ですが・・・」

“I brought you a little gift.”

無理に英訳すると上記のようになるが、このような英訳を瞬時に思い浮かべるのは難しく、又、英語になると全くニュアンスも異なってしまう、英訳の難しさが窺える。

このような英訳しにくい日本語独特の表現を他にも例を挙げ、それぞれの表現の日英比較を通して見えてくる、何か共通の英訳のしにくさ、例えば、日本語では主語を付けなくても済むところを、英語では上記例文のように、必ず付けなくてはならない等を明らかにする。そのような英訳のしにくさ、つ

まり顕著な日英表現の違いを、日英の思考習慣や文化の違い、又、話すという事そのものに対する考えの違いなどに結びつけながら説明し、英作文授業で英訳に苦しむ学生達の手助けとなるよう導いて行く。

## 1.2. 構成

本稿は以下のように構成されている。2章では、実際に英訳が困難とされがちな日本語独特の決まり文句の表現を挙げ、それらに対応する英語表現も載せ、3章では、それらの例文の日英比較をし、特に顕著な表現の相違、それが、主語の有無・敬意表現の有無である事を明らかにし、4章では、井出(1998)や鈴木(1975)の研究を基に、3章で明らかになった表現の大きな違いは、日本語母語話者・英語母語話者独特の思考習慣に起因している事を説明する。そして、最後に5章で、4章で明らかになった英訳のしにくさの根本的な原因をいかに英語教育に役立たせられるか、結論付ける。

## 2. 英訳困難な日本語表現例

以下に、特に英訳が難しいとされる日本語独特の

\* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師  
2009年9月18日 受理

決まり文句と、それに対応する英訳を、いくつか挙げてみる。

- (1A)お待たせ致しました。  
 (2A)どうも、この度は色々とお世話になりました。  
 (3A)つまらない物ですが・・・  
 (4A)お気を遣って頂いて・・・  
 (5A)お構いなく  
 (6A)そろそろ失礼します。  
 (7A)何のお構いもしませんで・・・

- (1B)I'm sorry to have kept you waiting.  
 (2B)Please accept my deepest thanks for all your assistance.  
 (3B)I brought you a little present.  
 (4B)You're always be thoughtful.  
 (5B)Please don't go to any trouble.  
 (6B)I should be going soon.  
 (7B)I hope you had a good time.

(1A)は(1B)に、(2A)は(2B)・・・と対応している。何か差し上げ物を持参して、知人宅を訪問し、帰るまでに発せられる典型的な日本語表現と、それらの英訳を例示したものが、上記の7種類である。

細かく見てみると、(1)、(2)、(6)であれば、英語でも頻繁に使われる表現であるが、この3つを除く残り4つの表現は、日本語としては良く使われていても、英訳された方、つまり、(3B)・(4B)・(5B)・(7B)は、英語としては現実味が薄く、無理やり英訳されただけと言って良い。つまり、ほとんど英訳不可能状態であり、無理やり訳したものの、日本語独特のニュアンスや、そこに込められている気持ちが、英訳表現には反映されていない。

ここまでニュアンスが変えられてしまう程の具体的な違いは一体何なのであろうか。

### 3. 具体的な相違

前章で挙げた例からわかる最も顕著な文法的違いは、主語の有無である。2つ目は、(1A)から(7A)に見られるような日本語独特の敬意表現、例えば、自分を謙遜したり卑しめたりする表現が、英語ではどうしても上手く表現されないという、敬語の観点

の違いが表れている。

#### 3.1. 主語の有無

2章の7つの例文で、最も目立つ文法的相違は、日本語では全ての例文において全く主語が無いのに対して、英語は全て主語が存在している事である。(2B)と(5B)は、命令形になっている為、I や You 等の主語は存在しないが、命令形というのは主語の You が省略されたものなので、(2B)では、**あなたが** accept して下さい、(5B)では、**あなたが**わざわざ骨を折らないで下さい、となり、目には見えないが、主語は隠れている。

わかり易さの為に、もう一度、(1A)と(1B)を以下に記しておく。

- (1A)お待たせ致しました。  
 (1B)**I**'m sorry to have kept **you** waiting.

日本語では、誰が誰を待たせたというような、人物表現は全く要らないのに対し、英語では、待たせたのは「I」であり、待たされたのは「You」であるという、動作主と、動作を被った人を明確にしないと表現として成り立たない。同様に、下記の(6A)(6B)：

- (6A)そろそろ失礼します。  
 (6B)**I** should be going soon.

にしても、日本語では、他の人々は帰らないが私はどうしても帰るというような特殊な状況でない限り、わざわざ主語を付けて「私はそろそろ失礼します。」とは言わずに、(6A)のように主語が無い言い方が当然であるのに対して、英語では、主語の「I」を必ず付けなければいけない。たとえ、知人宅に居るのは2人だけで、帰るのはその話者に決まっているとわかっていても、「I」が帰りますと、統語的に「I」を付けざるを得ない。

日本語では主語をいちいち明確にせず、英語では必ず動作主をまず明らかにする、という大きな違いがスムーズな英訳を阻んでいる事は間違いない。

#### 3.2. 敬意表現の違い

主語の有無という、はっきり目に見える文法的違い以上に困難なものが、敬意表現の違いである。前セクションでも取り上げた(6)では、英語の場合でも実際によく使われるものである、(6B)はさほど

大きな違和感はないが、細かく見てみると、主語の有無だけではなく、日本語の敬語のニュアンスが英語には欠けてしまっている。つまり、(6A)の「失礼する」には、せっかく良い雰囲気の場合に居たのに、突然、私がこの場を去って、空気を変えてしまう無礼をお許し下さいという、へりくだりの気持ちが形となって表れている一方、英語の(6B)では、「go」のように動作を表すニュートラルで、味気ない動詞を使うしか方法は無い。故に、「I」という主語を補わなければならないのに加え、「申し訳ないけどこの場を去ります」という、へりくだった敬語に完璧に対応する動詞も無い為、「そろそろ失礼します。」を、とっさに“I should be going soon.”と変換するのは、このような英語を使い慣れていない日本人達にとっては、相当のエネルギーや時間を必要とする面倒な作業である。

以下の(3)と(7)にしてみても、

(3A)つまらない物ですが・・・

(3B)I brought you a little present.

(7A)何のお構いもしませんで・・・

(7B)I hope you had a good time.

「つまらない物」という、自分の持参した品物を卑下するニュアンスは、決して、“a little present”で完璧に伝わるわけではないし、(7)では、自分のもてなしが至らなかったとへりくだる敬意表現が、英訳した文章の方には全く見当たらない。

この章では、特に英訳しにくい表現において、主語の有無や敬意表現の違いが、大きな壁となって立ちだかっている為に、英訳困難が生じる事をみてきた。しかしながら、日本語は主語を明示しない傾向にあるから、誰が動作主なのか良くわからずに適当に曖昧に会話をしていて、誰が主語なのかわからない頭の悪い民族というわけでもなく、又、取り上げた7つの英語例文に敬意表現が見当たらないからと言って、英語母語話者には相手を敬ったり、自分を謙遜したりする気持ちが全く無く、無礼な民族であるという、安直な結論の出し方ではあまりにも不公平でおかしい。スムーズな英訳を阻む、これら2つの大きな違いを生み出すと考えられる、日本語母語話者と英語母語話者の思考習慣の違いに次章では迫る。

## 4. 表現の違いを生み出す思考習慣

3章で顕著となった大きな違いは、日英語母語話者がそれぞれ、どのように人間、自他、人間関係を捉えているかに起因するであろう。特に、井出(1998)と鈴木(1975)を基にして筆者が考えた「自他独立型」と「依存・融合型」という言葉を遣って、日英の人間の捉え方に関する根本的な違いを説明するのが有用であるように思われる。

### 4.1. 「自他独立型」の英語母語話者

最初に、「自他独立型」という言葉で表現される英語母語話者の思考習慣から説明する。この「自他独立型」で人間を捉えるというのは、井出(1998)の「日本語学」の66～67ページに記載されている「西欧文化のルーツには、超絶的な神を擁するユダヤ教・キリスト教があり、神が人間を創造し、人間は神の下では平等であり、個人が世の中の最小単位であるという共通認識がある。神に対峙する人間が一人一人横並びに並んでいるという理想のイメージの下、個人主義社会が形成された。これが西欧の世界観の基本である。」という捉え方を基にしている。このような個人主義社会における言語の英語では、正に、「自他独立型」つまり、自分か自分以外かを明確に区別しながら会話をするようになったのは当然と言える。

「自他独立型」の捉え方により、主語の有無の違いを説明出来る。英語母語話者にとって、会話をする時、まずは、自分がやった事なのか、自分以外の人間がやった事なのかを明確に区別する為の主語は欠かせない事がわかる。故に、前述の例文(1)の「お待たせ致しました。」という、誰が誰を待たせたのか、動作主と被動作主が全く不明瞭な表現は、英語では有り得ない。

又、敬意表現の違いも説明可能となる。前章最後に書いたように、英語母語話者には、例文の「お待たせ致しました」の「致す」に込められているような謙遜の気持ちが無い、或いは、謙虚な気持ちが無いというわけではなく、井出(1998)の言葉を借りて言うと、神の下に平等に横並びの個人個人が、自他を区別して、こういう事をしたのは私だ、あれをしたのは彼女だ、あなたはこういう風に考えているけ

ど、私は違う考えを持っている・・・というような命題をまずは明確に合理的に伝える事が、会話の中で最優先されてくる為、日本語のような、相手を敬い、自分を謙遜するという上下関係を象徴する敬意表現は隠れてしまいがちになり、明瞭に言語化されていないと考えられる。

## 4.2. 「依存・融合型」の日本語母語話者

英語母語話者の「独立・依存型」の自己規定に対して、日本語母語話者の自己規定や思考習慣は、同じく井出(1998)で記されている以下の陰陽思想を基にした「依存・融合型」と言えよう。「中国文化のルーツは、紀元前10世紀ごろその後の世界観を形成したとされる『易経』の陰陽思想にある。『易経』によれば、世の中のものはすべて単独には存在せず、「関係」によって成り立っている。この世界観は、仏教、儒教などの背景ともなっており、宗教とともに日本などの東アジアの末端地域に伝播し、今日に至るまで東アジアの人々のものの見方を支配してきた。「関係」によるものの認識とは、例えば、「男」は必然的に「女」を伴い、・・・中略・・・東アジアでは一般に、自然に向かう人間の受動的な姿勢が社会的な人間行為の基礎となっている、と言われる。」

このように、常に相手が居るからこそ、自分も居られるという、相手に頼った「関係」を重視する東洋の世界観では、単独で存在する個人を重視する「自他独立型」とは違い、常に自分を相手と区別してしっかり主張するという習慣は生まれて来ようがない。又、相手と自分の区別どころか、人間同士や、人間と自然等も融合させて、お互いがお互いを察し合う傾向が、客観的・明示的な主語の表示を無くしていると言えよう。

鈴木(1975)でも主張されているような、正に「相手依存の自己規定」が基本となっているからこそ、日本人の持つ、柔らかく、そして、相手と同調しなければ安定しないような弱い自我の構造が、自分は自分であって、他人とは全く違うのであるという西欧のような主張を避けさせる原因となっている。

これらの考え方を基にすれば、前章で見て来た2つの大きな違い(主語の有無・敬意表現の有無)も上手く説明される。

主語の有無に関しては、日本語の場合、相手に依

存して全てを察してもらおうとする傾向から、常に、自他を主語を以ってして区別しなければならないような事にはならず、主語がばやけても、何の苦にもならないどころか、むしろ、その方が心地よいというわけである。

又、敬意表現の有無についても、「依存・融合型」の傾向や「関係」重視により、まず、相手が存在しているから、やっと自分が存在して、あなた様に敬意を表しますという意味で、相手と自分の関係を表す敬意表現は、日本語には欠かせない。故に、誰かが誰かに何かの行為を行うという一見すると味気ない命題中心で合理的に説明する表現が多い英語に対して、そのような人物や行為を中心に据えるよりは、まずは、相手が居てくれるからこそ自分も居るという関係を一番に明示したい敬意表現が日本語では目立ってしまう。

このような、もともとの思考習慣の大きな違いが、英訳のしにくさを生み出し、前述の例文(3)でも見たような、「つまらない物ですが・・・」を英訳しようとする際、まず主語を付けなければならない事に苦勞し、つまらない物という日本語独特の謙遜した気持ちをどうやって英語に組み込んだらいいのだろうかと思悩む壁にぶち当たらざるを得なかったのである。

## 5. 結論

本稿では、英訳しにくい日本語表現とその英訳表現を取り上げて、特にスムーズな英訳を阻む要因として、日本語ではほとんど付けない主語というものを英語では必ず付けなければならない点と、日本語では当たり前のように組み込まれている敬意表現が、英語においてはそれに相当する表現が見つからないという2点を挙げた。言語表現に表れているこれらの違いは、日本語母語話者の持つ「依存・融合型」の思考習慣と、英語母語話者の「自他独立型」のように、かなり根本的、且つ、無意識レベルな所に存在する為、それらを掘り起こして意識させながら、英会話や英作文を指導して行く事は大変困難である。

しかし、「依存・融合型」「自他独立型」という、根本的な文化のルーツや思考習慣の違いの事に全く触れずに授業を進めるのと、少しでも触れておく

のでは、全く効果も変わって来ると思われる。「自他独立型」の思考様式により、まずは誰が、その行為を起こしたのか、それは誰の考えなのか、又、ある物が自分の物なのか他の誰かの物なのか、常に明確にしておかないと、正しい英語の表現には至らないのに、そのような明確な表現が上手く出来ないのは、「依存・融合型」の傾向の我々日本人が主語や物をぼかす習慣にあるということを、しっかり自覚させてから、具体的な英語表現を教えていく必要がある。

## 参考文献

- 1) 井出祥子 1998 「文化とコミュニケーション行動—日本語はいかに日本文化とかかわるか」『日本語学』Vol. 17 No. 11
- 2) 鈴木孝夫 1975 『閉ざされた言語・日本語の世界』 東京：新潮選書